

○緑友会・清進福岡県議団 代表質問 二十八番 神崎 聡

皆さん、こんにちは。食と緑を守る緑友会・清進福岡県議団の神崎聡です。

平成26年、待ちに待ちましたNHK大河ドラマ「軍師官兵衛」が始まり、本県にとりまして素晴らしいスタートを切る年となりました。戦国乱世を終わらせるために突然現れた天才軍師、武力でなく智力を駆使し、生涯一度も合戦で負けを知らなかった男。ゆかりの地である本県の期待も大きく、佳境に入る頃には、全国から観光客が訪れ、県内各地で大いに盛り上がっていることを願っています。

また、今年初めての知事のふるさと訪問で、田川市並びに赤村を訪れて頂きました。知事、ありがとうございます。浦田県議・大島県議とともに、知事をお迎えし、田川にとりましても幸先の良い、年の始まりとなりました。

そして、知事訪問の翌日には、地元添田町の旧県立田川商業高校跡地で、株式会社山口油屋福太郎の添田工場・整備工事起工式が行われました。添田町だけでなく田川地域にとっても吉報であり、県産物を取り入れた商品開発や新たな雇用創出に大きな期待をかけています。多くの関係者のご尽力によって実現できたことに心から感謝申し上げます。

田川地域には「軍師官兵衛」のゆかりの地が少ないので、寂しい想いをしていましたが、官兵衛がなくても「めんべい」があります。「軍師官兵衛」同様に、地域振興に大いに貢献されています「めんべい」もよろしくお願いします。

さて、私はNHK大河ドラマ同様に好きなテレビドラマがありました。2002年、“遺言”で完結した「北の国から」からであります。北海道の富良野を舞台にした家族のドラマなのですが、大自然の雄大さ、美しさを背景に、自然と向き合う厳しさ、そして農業や地域の人たちの協力を通して人間としての生き方を考えさせてくれた素晴らしいドラマでありました。

「北の国から」の田中邦衛が演じる五郎は、「自然とともに生きよ。そうすれば死なない程度に恵みを受けられる」、そんな言葉を子供たちに残しています。五郎から二人の子供へという形ではありますが、実は、私たちに次の世代に何を引き継いでいかなければならないかを問いかけているんじゃないかと思うんです。大量生産・大量消費・大量廃棄で、地球環境はバランスを失い、「地球温暖化」「オゾン層の破壊」「PM2.5による大気汚染」あげればきりがありません。「北の国から」は循環型社会や環境問題、心の教育など、今の時代に投げかけているテーマに思えてなりません。

今回は本県の循環型社会への取り組み、環境保全、そして食の問題について質問致します。本県は昨年3月に第3次福岡県環境総合基本計画「福岡県環境総合ビジョン」を策定しました。この計画では「豊かな環境が支える県民幸福度日本一の福岡県」実現のため、重点的に取り組む、7つの柱を設定しています。その一つに循環型社会の構築があります。そこには10年後の将来あるべき姿として、リデュース・リユース・リサイクル、3Rの浸透と、資源の性質に応じた循環利用の確保、省資源化・長寿命化・再利用・リサイクル

製品の開発と利用する社会、バイオマスなどの再生可能な資源の活用、技術開発の進展と県内の資源循環関連産業の活性化を目指すとされています。

そこで知事にお尋ね致します。施策の方向と体系については総合基本計画に掲載されていますが、具体的にどのような施策を県内各地域で展開されようとお考えなのかお聞かせ下さい。また、資源循環利用に関する産業の育成についてのお考えと取り組みについて併せてお尋ね致します。

循環型社会づくりを進めるためには廃棄物対策は避けて通れません。様々な社会経済活動には必ず廃棄物が生じます。そして、これらの廃棄物は最終的には環境汚染を起こさないよう適切に焼却したり、安全性を確実に担保した上で埋立処分を行うことが重要であり、廃棄物処理システムが健全に稼働することが行政に課せられた使命だと思えます。本県の統計によれば、産業廃棄物の発生量は一般廃棄物の約7倍を占めております。したがって、県内の各企業・事業所・工場においては、できるだけ産業廃棄物が発生しないよう工夫し、再資源化や減量化に努めるなど循環型社会づくりに最善の努力を重ねなければなりません。今議会の条例議案で、「福岡県産業廃棄物処理施設の設置に係る紛争の予防及び調整に関する条例の一部を改正する条例」を提案しております。産業廃棄物処理施設の設置が地域の生活環境に与える影響について、指針に基づいて環境調査を行うことを明確にするなど、県民の安全・安心を担保するためには必要なものだと思います。

そこで知事にお尋ね致します。産業廃棄物の再資源化や減量化に当たりましては、適正な処理が必要となりますが、安心した暮らしにつながる、安全な産業廃棄物対策を住民の皆さんに理解・協力してもらうために、知事は、どのように取り組んでいるのかお尋ね致します。

産業廃棄物の適正な処理の推進にITを活用するため、平成9年に廃棄物処理法が改正され、紙マニフェストを交付する代わりに、記載内容を電子データとしてネットワーク上でやりとりをすることが可能な電子マニフェスト制度が創設されています。このようにITを活用した情報の管理は業務の効率化などの面で非常に有効であると思えます。

産業廃棄物対策におけるITの活用について、知事はどのように取り組んでいかれるのかお尋ね致します。

次に一般廃棄物燃焼処理問題についてお尋ね致します。日本のゴミ焼却場数は約1,200施設程度と、アメリカ351、フランス188、ドイツ154と比較しても圧倒的に多いことがわかります。財政力の弱い基礎自治体では、ごみ問題に限らず、水源開発や消防など、隣接する自治体が広域的に処理しなければならない問題が、今後ますます増えてくると思われます。

そこで知事にお尋ね致します。どのような体制と運用をとるのかは、あくまでも基礎自治体の責任だと思います。

人口から算出されるゴミの排出量や、収集区域の面積から算出される運搬・配送するためのランニングコストなどをかんがみ、単独か広域的に取り組むのか、焼却施設の設置計画

を決めていくと思います。

より効率的な焼却施設の設置計画となるよう、県ではどのように関わっていくのか知事にお尋ね致します。

次に、豊かな自然環境を守るため、英彦山の絶滅危惧植物の保護対策についてお尋ね致します。知事は、当初予算で、英彦山に生息する絶滅危惧植物の保護対策として、種子を採取し、県保健環境研究所で冷凍保存するほか、同研究所や「県立英彦山青年の家」などで保護育成を行うよう計画しています。地域における生物多様性の保全再生を着実に進めることにより、自然共生社会づくりを推進していく取り組みは、非常に評価すべきものだと考えます。

そこで知事にお尋ね致します。英彦山の植物を対象としている理由は何でしょうか。

現在、英彦山に生息する絶滅危惧植物のうち、ミヤマカラマツをはじめ、シカの食害が原因とされているものは、17種類ありますが、具体的にどのようにそれらを保全再生しようとしているのかお聞かせ下さい。

また、添田町には英彦山から連なり、千本の桜で有名な添田公園があり、岩石山があります。私の自宅は、この公園の下にあるんですが・・・「豊前一の堅城」「難攻不落」という評判もあった岩石城でありましたが、秀吉の九州平定で攻められ、一日で落城してしまいました。世に言う岩石城の戦いでもあります。

実は、ここ岩石山にもウドカズラ・マツグミなどをはじめ、絶滅危惧植物が生息しています。赤村と添田町にまたがる岩石山は筑豊県立自然公園に指定されていますが、岩石山もシカの食害が多いため、特に民家が近く、登山客が多いため、狩猟してシカを捕獲することが大変困難であります。

そこで、本県で初めて取り組まれます、英彦山での絶滅危惧植物の保全対策を先進的モデルとして、英彦山以外の絶滅危惧植物にも取り組んでいくべきだと考えますが、知事のご所見をお聞かせ下さい。是非とも、専門家の育成とともに今回の英彦山での取り組みを成功させて頂き、横展開して頂きたいと思います。

最後に学校における栄養教諭の役割と学校給食・食堂における衛生管理について教育長にお尋ね致します。

今年に入りノロウイルスによる感染性胃腸炎が各地で広がっております。学校関係では、浜松市で給食の食パンが原因とみられる集団感性が発生し、児童1,000人以上に広がりました。九州でも高齢者施設や同窓会の会食などで発症し、大分県では県独自にノロウイルス食中毒注意報を発令し、大分県教育委員会は、市町村や給食用のパンやご飯などを納入する業者向けに、衛生管理の徹底を呼びかける緊急通知を出しました。福岡市では今季から小中学校の手洗い場に置く石鹸について、ウイルス付着の恐れのある固形タイプの使い回しをやめ、液体タイプへの切り替えを進めています。

これまで学校給食では、細菌性食中毒の発生を抑えてきましたが、現在はノロウイルス食中毒が主流となってきています。ノロウイルスは食品に付着しただけで食中毒を起します

から、調理過程でのウイルス汚染を防ぐためには、学校給食調理環境の整備が必要です。そこで教育長にお尋ね致します。県教委では学校給食における衛生管理についてどのように指導しているのでしょうか。

食中毒を未然に防ぐには学校給食衛生管理の基準の厳守が求められ、衛生管理を徹底するためには、栄養教諭・学校栄養職員の役割が大きいと思います。栄養教諭の配置基準はどのようになっているのかお尋ね致します。また、栄養教諭などが配置されていない学校現場ではどのような衛生管理体制がとられているのでしょうか。併せてお聞かせ下さい。

次に、県立高校の食堂は、民間が運営していますので、一般の飲食店同様に保健所からの指導に基づく衛生管理が行われていると思います。先月28日、国会議員が議員会館の食堂の弁当を食べてノロウイルスに感染していた疑いがありましたが、子供たちの食の安全・安心の観点から、県立高校の食堂での食中毒または感染症への危機管理に対しても細心の予防措置を講じる必要があると思います。医療機関や保健所との連携はどのようになっているのかお尋ね致します。

栄養教諭というのは、食に関する指導と学校給食の管理を一元的に行い、配置校において「食」の実態を把握し、専門性を生かしてタイムリーに、指導資料の作成・提供を行っています。また、各市町村内生産者との連絡を密に、地場産物の活用を図り、専門性を生かして、教科担任とは違った立場で、生徒に「食」の指導を行っています。栄養教諭が配置されていない小規模校では、施設・設備・児童の実態など細かな献立作成が十分でなく、栄養教諭から調理員への的確な調理作業の指示が出来ていないのが実態なのではないでしょうか。

そこで教育長にお尋ね致します。センター方式、自校方式、また栄養教諭が配置されていない小規模校の献立作成など、各地域・各学校によっては、栄養教諭の業務に負荷や負担がかかっていると聞きます。どのような対策を考えられているのか。また、栄養教諭が配置されていない学校の「食」に関する指導はどのようになっているのでしょうか。お尋ね致します。

学校給食の衛生管理、献立の作成、食の指導など多岐にわたり、様々な役割を担っています。栄養教諭に対して、県教委として、どのように支援していくのかお尋ね致します。私は、衛生管理対策の強化や、「食」に関する指導の充実のため、栄養教諭を増やすべきだと思いますが、教育長の見解をお聞かせ下さい。

地元の山中で、竹炭をつくっている方と会いました。その方は、手掘りでおおよそ1ヶ月かかっていると仰っていました。まさに「北の国から」の世界でありました。今の子供たちの生活は、自然環境と接する機会が少ないものですから、私の4人の子供たちには、10才になると「南の島へ」、屋久島に1年間の山村留学に行かせています。ご存知の通り、世界自然遺産の屋久島は、九州最高峰の宮之浦岳をはじめとして「洋上のアルプス」とも呼ばれ、この地形がおりなす気候には、実に亜熱帯から亜寒帯までが含まれ、日本列島の気候を凝縮したような島であります。屋久島は自然を生かした電力発電などの取り組みをする

一方で、シカなどの有害鳥獣問題、観光による環境汚染など様々な課題も抱えております。まさに、「北の国から」の大きなテーマであった循環型社会への提言が、世界自然遺産を抱える屋久島にも問いかけるものがありました。

「北の国から」で最後に五郎はこんな言葉を子供たちに残します。

「・・・・金なんか望むな。幸せだけを見ろ。ここには何も無いが、自然だけはある。自然はお前らを死なない程度には充分、毎年食わしてくれる。自然から頂戴しろ。そして謙虚に、つつましく生きろ・・・・」

自然と共存し、人間が生きていく為に必要なだけの恵みを受けるといふ、このドラマの原点を今一度考え、私の一般質問と致します。

ご清聴ありがとうございました。